

第1章 イギリス・ジェネラルバプテスト（1660年まで） （続き）

バプテスト受領者の頭に手を置くこと（按手）への論争

1650年代のジェネラル・バプテストの教会について、今日最も詳しく記録しているのはフェンスタントン記録（Fenstanton Records）だが、そこにはバーフォード時代のデンの経歴についてある相違が見出される²⁹。それはデン個人の活動と彼の教会の様子に光を当てているだけではなく、彼の近隣の教会との広い交わりに関する貴重な情報も記している。現在、1651年11月以前の詳しい記録は残っていないものの、それによれば、ヘンリー・デンは、1644年から45年にかけて、フェンスタントンの教会で古い教会員にバプテストを受けた責任者であった。ワーボーイズ（Warboys）の教会もデンの宣教によって生まれた教会であるらしい。その教会は1647年にフェンスタントンから独立している³⁰。

1651年に出された『30教会の信仰と実践』（*The faith and practice of thirty congregations*）の署名者にフェンスタントンのエドモンド・メイ（Edmund Mayle）とトマス・コックス（Thomas Coxe）が含まれており、ラトランド（Rutland）、レスターシャー（Leicestershire）、リンカーンシャー（Lincolnshire）とその近隣の郡からもそれぞれ一名が署名者として名を連ねている。これらの地域ではサムエル・オーツ（Samuel Oates）が活動し、ヘンリー・デンも少なからず活動していた。従って、1651年の告白には、明らかにベル・アレイ（Bell Alley）の教会の伝道者たちの影響が影を落としているようだ。その告白には、教会と教会の働きに関する複数の教えに混じって、教会員資格としての浸礼による信仰者のバプテストの強調が際立っている。同時に、信仰生活に関係する教会員への教会規律（church discipline）の適用を強く求めるべきこと、窮乏に喘ぐ教会員に「食料と衣類」を与えて助けるべきこと、特別な助けを必要としている人々のために近隣教会の支援を取り付けるべきこと、牧師達は任意の献金で支えられるべきであるが、「必要な食物と衣類で満足すべきであり、自分の手で働いて、法外な給与を要求すべきでない」こと、個々の教会で起こった未解決の論争に対する忠告は交わりを持つ教会に求めるべきこと、「正当な議会運営において」用いられる行政的な権限は「当該教会とその教会の運営によって」のみ認められるべきことが強調されている。注目に値するのは、バプテストの際、バプテストを受けた者の頭に手を置くこと（按手）が言及されていないということである。それも、多分フェンスタントンの教会では行われており、ジェネラル・バプテストの間ですでに論争になっていた問題であったにも関わらず、である。この問題は、1650年代のジェネラル・バプテストを分裂に至らせた主要な要因であったが、同じ時期、パティキュラー・バプテストでは、信仰者のバプテストが教会員資格と主の晩餐受領の要件であるか否かが問題となっていた。少なくとも1655年末頃、サムエ

²⁹RCC, 1-264

³⁰*Ibid.*, 267ff.

ル・オーツが主の晩餐の受領資格としてのバプテスト時の按手を強く牽制していたことはよく知られている³¹。

1653年9月の初めに、ウェストビー（Westby）やリンカーンシャー（Lincolnshire）の教会は質問状を書いて、「バプテストの際に頭に手を置かれていない者を教会員として認めない理由」をフェンスタントンの教会に問うている。この二つの教会は、そのような者たちを教会員として入会させていた。そして、最終的に次のように記した。「（そのような明らかな矛盾は）不従順を助長するだけでなく、パン種の入っていない兄弟たちと教会に対して霊の憤りを掻き立てる」。フェンスタントンはそれに対して、ローマ信徒への手紙14章1節、並びに使徒言行録18章26節に基づいて立場を正当化した。そうする中、同じ月に、フェンスタントンはトゥールビー（Thurlby）の教会からも手紙を受け取った。それによれば、リンカーンシャーの教会の牧師ロバート・ライト（Robert Wright）が彼自身がバプテストの際に按手を受けていたので、教会に牧師解任を強く求めたと言うのである。そして実際にそうなったのだが、それから数ヶ月後、今度は教会籍も抜きたいと希望してきた。原因はまたしても彼が問題にしたバプテスト時の按手であった。フェンスタントンの役員であったエドモンド・マイルとジョン・デン（John Denne、ヘンリーの息子）の二人は、この時、両者を和解へと至らせることに成功した。1653年初頭、この両者はウィズビーチ（Wisbech）とピーターバラ（Peterborough）の教会の招きに応え、これらの教会でバプテストの按手を行うために派遣された。しかし、ウィズビーチではそれが実現しなかった。カニングスビー・タテソール（Coningsby・Tattershall）と、リンカーンシャーの教会からジョン・ラプトン（John Lupton）とジョセフ・ライト（Joseph Wright）がやって来て、妨害したからである。彼らは、「按手を受けた者は、按手を受けていない者たちの交わりから出るべきである」と言って止まなかった。その熱気がラトランドのトーペ（Thorpe）の教会の、役員を含む多数派に伝わったことは明らかで、その教会は「按手を受けた者とは交わりを持たない」という教会決議をしてしまった。トゥールビーの教会に対しては、この件を巡って教会間の交わりの破棄の告知に至った。フェンスタントンは一連の動きを悔い、レスター（Leicester）で代表者が会した際になされた、この論争のいずれの見解を取るにしても共に協力するとした合意にとどまるべきだとした。しかしながら、それに対してトーペは、一切の歩み寄りを示さなかった³²。

しかし、この極めて強力な主張を唱えていたラプトンとライトの二人は、単に自分たちのイニシアチブでそのような行動に出ていたのではなかった。ジョン・ラプトンはジェネラル・バプテストの指導者のひとりで、1654年にロンドンに会し、「現状の勢力への忠誠」を確認する『簡素な表明と弁明（*The humble representation and vindication*）』の作成に加わっていた。しかしながら、そこではそれ以外の問題についても話し合わせ、按手のない人々とは決して共に晩餐に与らないことも決定されたようである。この時の参加メンバーには、翌年クウエーカーに転じたサムエル・フィッシャー（Samuel Fisher）、ジェネラル・バプテストの見解を論じた『人間の全き信仰』（1659年）の著者ウィリアム・ジェフリー（William Jeffery）、ジョン・ラプキン本人と、ベンジャミン・モレリ（Benjamin Morley）

³¹Lumpkin, 174-88; John Griffiths, *Gods Oracle and Christs Doctrine*, 1655, 61.

³²RCC, 60-8, 69,71,127-30, 143,202-6.

らが出た。モレリはノザンプトンシャー・ラーフェンスロープ（Ravensthorpe）の出身で、オーツの影響を受けた教会の会員であり、1651年の告白に署名していた。参加者リストの筆頭はロンドンの指導者ジョン・グリフィス（John Griffiths）で、自著の『神のことば（託宣）とキリストの教理（*Gods oracle and Christ doctrine*）』（1655年）で、バプテスマを受けた信仰者の按手について強く論じていた。この見解は、1656年の11月にロンドンで開かれた大会で再確認され、これに賛同した多くの指導者の立場を代表するものであった³³。

これについては、何が問題であり、何が教会と教会員の交わりの破綻をもたらしたのだろうか。ほとんどのバプテストは、神学的確信の差異はあれ、按手とはヤコブ書5章14節以下に記されている通り、教会の執事や長老（牧師）への按手と病人への按手であるとの主張で合意を見ていた。しかしながら、バプテスマを受けた信仰者の按手の必要を主張する側もまた、教会が自らの規範とする聖書から主張を導き出し、そこに立っており、たとえ信仰者のバプテスマであっても頭に手を置かないバプテスマは不完全だと信じていた。最終的には、この行為はジェネラル・バプテスト内で広く受け入れられたが、トラクトによる論争を通してカルヴィン主義バプテスト（訳者：パティキュラー・バプテストのこと）をも巻き込み、トマス・ティラム（Thomas Tillam）他、数人のカルヴィン主義バプテストはその行為を採用した。ベンジャミン・キーチ（Benjamin Keach）などは、1670年代にジェネラル・バプテストからパティキュラー・バプテストへ転向した後もこの立場に立った。

1650年代、ロンドンのダニングス・アレイ（Dunning's Alley）教会の牧師ジョン・グリフィスとウィリアム・ライダーは（William Rider. W.T. Whitleyは彼がサザークでキーチの前任者だったと言う）、その立場に賛同して文書を公表した者達の仲間であった。ウィリアム・キッフィン（William Kiffin）、トマス・コリヤー（Thomas Collier）、エドワード・ハリソン（Edward Harrison）らカルヴィン主義バプテストの指導者はこれに強く反対した。

推測がつかかもしれないが、例えば、ウィリアム・ライダーが1656年に出した『按手を擁護する』で明らかにしたこの行為についての主な論点は、それがヘブル書6章1節以下の使徒的教会の原理と実践に基礎付けられているか否かにあった。その後、ライダーが最も関心を持つようになったのは、その行為があらゆる時代の教会に対してキリストが望まれることだと信じ、それに従順であるべきだと勧めることだった。

それにも関わらず、ライダーや彼の同調者たちが中身の無い儀式に単に従順であったと考えてはならない。ライダーは、バプテスマを受けた者は「聖霊を受けることを約束する手段」としての按手を受け入れるべきだと信じていた。極めて慎重にはあったが、使徒たちに対しても、その後継者たちに対しても、儀式自体は聖霊を授ける力のないことを主張した。しかし、神の意志への従順は信仰者を祝福へと導き、そのような信仰者は「従順のうちに約束の聖霊の分与者としての歩み」を為すと論じ、彼の信奉者に対して「この礼典において神が備えた手段を用いること。そこにおいて神はご自分の民を聖霊の分与者となさしめる」と励ました。

³³MGA 1, 1-5, 6-9.

さらにライダーは、依然としてバプテスマ時の按手を否定する者たちと交わりを保っている友人たちの言い分を、神の意志に服従しない者たちの言い分と述べた。これについての彼の見解は、独立派（会衆派）との晚餐を「異なる者との晚餐（mixed communion）」として拒否した多くのバプテストの考えと酷似していた。独立派は信仰者のバプテスマについて、神の意志を何も知らないか、またはそれを愚弄しているかのどちらかであるので、独立派と交わりは聖書的な徳に反しており、またそれは彼らが過ちに陥っていることを確認させる事柄であると言うのだった。ライダーを批判する人々は、彼の主張に従うと、善良な人々との交わりを壊してしまうことになる懸念したが、それに対してライダーは、「主イエス・キリストと創り主ご自身が、我らに先だって被造物を愛される神の愛とその行為について、あなた方の愛がいかに小さいかがわかる」と、容赦のない反論をした³⁴。

（続く）

³⁴W. Rider, *Laying on of hands asserted*, London 1656, 21, 87, 89, 92-9.